The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	光源氏の運命 : 藤壺事件の深層を中心として
Author(s)	朴, 貴仙
Citation	詞林. 1997, 22, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67404
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

光源氏の運命

―藤壺事件の深層を中心として―

朴　貴仙

はじめに

桐壺帝は、高麗人の予言（桐壺巻）を聞き、光源氏の皇位継承を断念する。そして若紫巻では、光源氏の子供が皇位を継承するという予言が述べられる。光源氏の皇位継承を諦めた桐壺帝の意志で、光源氏の子供が皇位を継承することになる。かつて実現し得なかった皇位継承が光源氏の子供につながるのである。

本稿では、光源氏の子供に皇位が継承されるという物語の構造に焦点を絞り、光源氏と藤壺との密通が持つ必然性を明らかにすることを目的とする。このような考察は、数多い光源氏の運命物語論の中で、今まで見落とされてきた皇位継承と桐壺帝の意志、さらには藤壺事件との関連性を読み解くための有効な指針になると思われる。

一、「わたくしもの」の誕生

藤壺の死後、自らの出生の秘密を知った冷泉は、「故院の御ためもうしろめたく、大臣の、かくただ人にて世に仕へたまふもあはれにかたじけなかりけること」（薄雲・四四三）[1]というように、まず桐壺帝のことを思い出し、実父光源氏の地位ついての思いをめぐらすが、物語の中において当の桐壺帝は、生存中も死後も藤壺事件については何も知らない。生前の桐壺帝にとって重要なのは、「あさましきまで、紛れどころなき御顔つき」の男皇子が「かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出で」た「瑕なき玉」であるということである。従って光源氏の血を引く子供の立坊は、その桐壺帝の意志で行われたのである。また桐壺帝は、死後も朱雀帝の夢にまで現れ、冷泉への譲位を促す。冷泉は、桐壺帝にとってそれほどまでに保護すべき存在であった。

桐壺帝は生まれてきた幼い冷泉を目の前にして、

源氏の君を限りなきものに思しめしながら、世の人のゆ

るしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧ずるままに、心苦しく思しめすを、（紅葉賀・四〇〇～四〇一）

と、かつての「わたくしもの」である光源氏の誕生時の政治的状況を追想する。

そもそも『源氏物語』は、「適切な愛の分配機関」[2]でなければならなかった天皇が身分の低い更衣に傾き、宮中世界の秩序が乱れたことから始まる。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（桐壺・九三）

いつの治世であったか、女御・更衣が大勢仕えている中、あまり身分の高くない更衣が帝の寵愛を一身に集めていたという。その桐壺更衣は父大納言が世を去った後、彼の遺言を守り通すべく母北の方の尽力によって入内していた。桐壺更衣は天皇にこよなく愛され、それが周りの人々の嫉妬と恨みを買うことになる。

このように、主人公の前史として語られる両親の恋物語は、宮廷の政治的一大事件として、国家政治に関わる既存の政権家達をも刺激してしまう。桐壺帝と、確固とした後見のついていない桐壺更衣との恋騒動は、帝に仕えていた女君ばかりでなく、女君たちの後見たる外戚政治家の間にも取りざたされた。そういうところに「世になくきよらなる玉の男皇子さへ」（桐壺・九四）生まれてきたのである。桐壺帝と母更衣との、身分と政治的現実を超えた「前世」の契りにより生まれてきたこの劣り腹の光源氏を、桐壺帝は「私（わたくし）ものに思しかしづきたまふこと限りなし」（桐壺・九五）とあるように、秘蔵子とする。同時に、光源氏の誕生後、桐壺帝は桐壺更衣を淑景舎から後涼殿（清涼殿の西にある）に移させるなどして寵愛を深める。このような光源氏・桐壺更衣に対する桐壺帝の振る舞いは、有力な皇太子候補である一の宮の母弘徽殿女御と歩調を合わせる外戚政治家らの危機感をさらに募らせ、やがて東宮位空白という状況のもとで立太子争いへと発展していく。

帝は、桐壺更衣の生存中から、光源氏の立坊を強く意識していた。それは、光源氏の袴着儀式からも読みとれよう。有力な東宮候補者である一の宮に負けないほどの盛大な儀式を通じて、帝は内外に光源氏の存在を知らしめたのである。

また桐壺帝は、正四位上で亡くなった桐壺更衣に従三位の宣旨を下し、鎮魂をする。その追贈三位の宣旨は、物語の冒頭から問われていた女君の身分ともつながっているが、それは同時に光源氏の身分の格上げを狙った上での操作とも思われる。外戚政治が盛んな宮中世界で排除されなければならなかった桐壺更衣の逼迫の最大の要因は、身分が低いことと、政治的影響力を発揮できる外戚の不在とにある。それは、光

源氏の運命に大きな影を落としていた。帝の光源氏寵愛が深ければ深いほど、出自の低さと外戚不在とが浮き彫りにされるのである。桐壺帝は桐壺更衣を寵愛することで、外戚排除の政治論理を実践していた。しかし、それが政治世界の矢面に立たされたとき、桐壺更衣の身分が最大の問題となっていた。だからこそ立坊争いをめぐって、一の宮の母女御と対抗させるためには、「一階の位」でも光源氏の母の位階を高くする必要があったのだと考えられる。

にもかかわらず、

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思しはばかりて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、さばかり思したれど、限りこそありけれ、と世人も聞こえ、女御も御心落ちゐたまひぬ。（桐壺・一一三～一一四）

とあるように、桐壺帝は光源氏の立坊を断念せざるをえなくなってしまったのである。

光源氏の資質は十二分に東宮にふさわしいものであった。それ以上に桐壺帝自らの倭相による運勢判断で、「倭相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりける」（桐壺・一一七）とあるように、光源氏の生まれつきの帝王の相を意識していた。桐壺帝が光源氏を立太子の候補者として扱っていたのは、光源氏が「わたくしもの」であることと同時に、帝王の相の持ち主であったからに他ならない。

桐壺巻での高麗人の予言を受け、桐壺帝は光源氏の皇位継承の可能性を封じてしまう。しかし、桐壺帝は光源氏への皇位継承を完全に諦めたわけではなく、「わたくしもの」である光源氏に皇位を譲りたかった。自らも政治勢力と有力な後見を持たなかった若き桐壺帝は、身分の低い更衣腹の光源氏を立坊させることができなかった。身分の低い桐壺更衣が生きている限りそれは不可能であった。死後に従三位に叙せられる悲恋のヒロインの退場が急がれるわけである。かわりに高貴な身分の藤壺の登場が必要となり、その結果不義の子が生まれ、桐壺帝の意志により光源氏の血が皇位を受け継ぐことになるのである。

二、高麗人の予言と賜姓源氏

物語は執拗に光源氏の神才と美貌を語り続ける。いかに光源氏が天皇位に適任かを、身分で語るのでなく、素質と容貌で強調していくのである。若宮は七つになり、卓越した容貌に才能までが加えられていく。弘徽殿女御腹の第一皇子の立坊が決まった後もなお光源氏の立坊を諦めきれない桐壺帝は、来朝していた賢明な高麗の相人に光源氏の運命を占わせる。

桐壺帝は、この皇子を右大弁の子に見せかけて高麗の相人が泊っていた鴻臚館に赴かせた。相人は、若宮の不思議な観相に疑問を抱きながらも、

国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下を輔弼くる方にて見れば、またその相違ふべし。（桐壺・一一六）

と述べる。

この部分は、主人公の運命を述べているだけに発言の真意をめぐって、古注以来様々な論議が行われてきている。[3] ここでまず高麗人の発言の真意を確かめておきたいが、字句的解釈から言うと、光源氏は帝王として天下を統治する相を持って生まれたが、即位すると乱れが起き得るので帝王に即位してはいけない。だからといって、人臣となって統治者を補佐する最高位の政治家の相であるかと観ると、そうでもない、光源氏は臣下として生涯を終えるのではないということだろうか。[4] 結局、字句的解釈からは、その真意は明らかにしがたいものの、見逃してはならない点が二つある。

まず一つは、光源氏が帝王の相の持ち主であるということである。その予言の裏付けとして出されるのが、前節でも触れた桐壺帝の自らの倭相であった。その結果は、宿曜の名人の判断とも同じであった。桐壺帝は、「かしこき御心に、倭相を仰せて思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを」（桐壺・一一七）というように、自らの倭相により若宮を親王にも叙してなかった理由を明かす。光源氏は「世になくきよらなる玉の男皇子」（桐壺・九四）として生まれて以来、「めづらかなるちごの御容貌」（上同）が強調され、弘徽殿女御腹の皇子達さえ「この御にほひには並びたまふべくも」（桐壺・九四～五）なかったのである。光源氏の「ありがたくめづらしきまで見えたまふ」（桐壺・九七）容貌は、三歳の折の盛大な袴着への世人の批判も圧倒してしまうほどであった。桐壺更衣の死後も、宮中に参内している光源氏の容貌は、「いとど、この世のものならず、きよらにおよすけたまへれば、いとゆゆしう思したり」（桐壺・一一三）とあるように、この世のものとは思われないほどであった。

父桐壺帝は、物語の中で繰り返し光源氏の「世をたもつべき相」についての判断を述べている。「世をたもつ」とは、『源氏物語辞典』[5] によれば、国を統治する、天下に君臨することである。日向一雅氏[6] の検証で明らかにされているように、「世をたもつ相」とは、光源氏も含めてすべて天皇としての治世を意味している。例えば「（光源氏の）世をたもち給ふべき御宿世」（少女・六九）、「（冷泉の）世をたもたせたまはむに憚りあるまじく」（明石・二六四）、「（朱雀院が東宮に）宮にもよろづのこと、世をたもちたまはん御心づかひなど」（若菜上・一三）などがそうである。

そして二つ目は、高麗人の予言が、桐壺帝が光君を臣籍降

下させる決定的な判断の根拠となったということである。すなわち、この予言で秘蔵子の皇位継承が消えてしまったということが最も重要な点なのである。

この予言の設定自体について、塚原鉄雄氏[7]は「予言は附帯的な確認としての記述にすぎないし、高麗相人の源氏観相は、爾後の物語展開に関与するところがない」とされるが、伊井春樹氏[8]の指摘でも分かるように、作者の桐壺巻執筆時における、光源氏の運命に関する将来のはるかな展望を、二条院をめぐる栄花の出現であると考えるならば、それを根底から支える思想が、高麗人の予言であったのであり、第一部（桐壺巻から藤裏葉巻まで）における物語の展開において重要なキーワードの一つになっているのは否定できないであろう。高麗の予言の導入の必然性はそこにあるのではなかろうか。父帝は、光源氏の帝王の相を知っていながら、あえて賜姓源氏を選んだ。桐壺帝は、高麗の相人の予言で光源氏への譲位を断念したのである。

ただ興味深いのは、桐壺帝が光源氏への皇位継承を断念したにも関わらず、結果的にはその光源氏の子息（冷泉）に皇位が継承されたということである。そして、それには藤壺との密通事件が重要な意味を持っている。次節ではその点について考察を加える。

三、若紫巻の予言

桐壺更衣の死後、その形代であり、光源氏の運命を大きく左右する女性が物語に登場する。その女性が「光る君」とともに「かかやく日の宮」と並び称された藤壺である。

藤壺の入内の経緯は、

「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、思しつつみて、すがすがしうも思し立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただわが女御子たちの同じつらに思ひきこえむ」と、いとねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべくなど思しなりて、参らせたてまつりたまへり。

（桐壺・一一八～一一九）

とある。桐壺帝は、母后の死後、兄兵部卿が後見としての実力を持っていなかったため、弱い立場に置かされていた藤壺を、入内させたのである。

先帝の四の宮藤壺は、「げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる」（桐壺・一一九）容貌と、後見のない境遇という点において桐壺更衣に似ていても、「これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえた

まはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人のゆるしきこえざりしに」（桐壺・一一九）とあるように、身分は遥かに違っていた。物語の冒頭から問われていた後宮世界における女君とその子供の身分の問題は、藤壺という内親王の登場で新しい展開を迎える。ここで特に重要なのは、光源氏が高麗人の予言により臣籍降下した後に、藤壺が入内したということである。

高貴な内親王は、立坊はおろか親王にすらなれなかった光源氏の臣籍降下の後登場する。そして、

上も、限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへ聞こえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。頬つきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、（桐壺・一二〇）

というように、桐壺帝の意向により「かかやく日の宮」と「光る君」は限りなく近接していく。継母と秘蔵子との親密な親子関係を望んだ桐壺帝の意図とは裏腹に、光源氏の思いは帝の後押しで色濃くなっていく。桐壺帝は、この最愛の二人の密通を意図したわけではないが、結果的にその場を提供してしまったのである。

若紫巻で十八歳の中将光源氏は、静養のため里下がりしていた継母藤壺に迫った。密会の後、光源氏は異様な夢を見た。それは、

中将の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」・・・（若紫・二〇八）

というもので、ここでの「思しもかけぬ筋のこと」とは、当然皇位のことであろう。夢解きは、続いて光源氏が謹慎すべきことを述べている。身の置きかたに対して警告を受けた光源氏は夢解きに口外を禁じるが、藤壺の懐妊と自分の夢を思いあわせ、生まれてくる子が自分の血を引き、なんらかの関わりで自分も皇位と関連するかも知れないと思いを馳せるのである。

光源氏が夢解きをさせて得た予言は、光源氏の血を受け継ぐ子供に関するものであった。臣下の身分では終わらない。しかも即位してはいけない帝王の相の持ち主が、天皇の最愛の妻を犯し懐妊させ、生まれてきた子供の手で栄華を極める。このような物語の構想がここで明示されているのである。皇族から外された光源氏は、このようにして藤壺と関係し、冷泉を挟んで運命共同体として栄枯盛衰を分かちあう。

桐壺帝が光源氏に皇位を嗣がせる道は、高麗人の予言で完全に閉ざされたのではなかった。物語は光源氏の血を引く子供を用意していた。その子供は「瑕」の無い「玉光る」[3]ものでなければならない。すなわち、「上の品」腹の子供の誕生が

要求されるわけで、そこに光源氏と藤壺との密通事件の意義がある。光源氏が見た若紫巻での夢は、結果として桐壺帝の意志で現実化する。桐壺帝は、弘徽殿女御腹の第一皇子への譲位を約束し、冷泉を皇太子に立てたのである。

四、「瑕無き玉」の皇位継承

光源氏は、藤壺との密通をもととする、自分と子供の輝かしい未来を聞かされた。その後も光源氏は我が子を身籠もった継母に対して情熱を押さえ切れないが、藤壺は光源氏を頑なに拒否する。藤壺は、罪の子が成長し東宮になってからは、我が子の安泰のためだけに生きる。

桐壺帝の結願の日、藤壺は出家を断行する。

最終の日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ、兵部卿宮、大将の御心も動きて、あさましと思す。親王は、なかばのほどに、立ちて入りたまひぬ。心強う思し立つさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌みこと受けたまふべきよしのたまはす。御をぢの横川の僧都近う参りたまひて、御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみちたり。（賢木・一二二～一二三）

右の引用文に出てくる藤壺の出家の意義について、関根慶子氏[10]は、一面では源氏の執心を逃れ、一面では東宮の為に源氏の出家を防ぐ結果となったとし、密通以来の藤壺は悶々として悩み、決して肯定的な「喜ばしい恋」ではなかったと指摘される。一方、高橋亨氏[11]は東宮（冷泉）の危機から即位までをめぐって、「断固として出家を含んだ政治的判断による行動をしたのは、光源氏ではなく藤壺であり、その主体性を支えた論理は〈恋＝好色〉を封じたところでの〈王権〉の問題にあった」とされる。以上の論に加えて考えるべきことは、なぜ、藤壺に冷泉の無事即位のため身を投じるという物語の至上課題が課せられたかである。

物語の中で、藤壺は極めて朧化されている。清水好子氏[12]の指摘のように、「読者は藤壺の存在を、対象としてでなく、光源氏の心情を通して、ある力、ある影響力として感じ」とる。光源氏と藤壺との愛情関係については、相思相愛であったと取る側と、それを否定する立場に大きく分れているが、阿部秋生氏[13]は、藤壺には「愛する人の子を身ごもったというひそかな歓びの感情は全く動いた様子はなかったようである。とすると、藤壺の宮には、源氏を、愛情の対象として見る気持ちはないというべきものではあるまいか」と指摘された上、「藤壺の宮は、源氏が春宮のために献身的に後見することを、喜ぶことは確かだが、その喜びは、源氏が春宮にとって最も有力・忠実な後見役であることを評価するだけで、源氏を愛情の対象と認めていたわけでもなく、また春宮の実父としてひそかに遇することを考えたのでもないことが次第にはっき

りするように思う。」とされている。なるほど物語の中で、光源氏に対する藤壺の愛情を読み取ることは難しい。しかし、藤壺には、「愛情」以上に考えなければならない問題がある。

藤壺はなぜ出家したのか。なぜ罪の子の即位のために自己犠牲を払ったのか。なぜ桐壺帝の死後、光源氏と手を組んで政治陰謀を謀ったのか。それは、桐壺帝の冷泉の即位の意志に徹するためであった。藤壺が光源氏を断固と拒否し続け、冷泉の安泰だけに生きるのは桐壺帝への罪滅ぼしのためでもあったが、桐壺帝の意志—冷泉の即位と光源氏の後見—を守り通すための英知であった。

後藤祥子氏[14]は、「藤壺は出家後、懲罰的廃后ではないまでも、出家後の形式的な中宮職の停止が実質的な身分保障まで奪うという、慣行上異例の措置がとられていた（澪標巻では復権している」）と指摘している。しかしながら、藤壺にはもとより先帝から受け継いだ豊富な経済力があり、それを基盤に、出家後も仏事供養などにおいて物惜しみなく専念できたのである。

藤壺は、皇族という出自で入内し、桐壺帝の寵愛と強い経済力を備えていた。一家の再繁栄を謀ろうとする没落した中流貴族の熾烈な夢を否応もなく背負わされた娘ではない藤壺は、出家してまでも冷泉の即位を切望した。また、斎宮女御の入内において、源氏と手を組んで政治的策略を密かに行ったのも、すべてが冷泉の安泰を基本軸としているのである。冷泉の即位は、いわゆる物語の論理としては藤壺と源氏とに与えられた至上課題ではある。しかし、藤壺の行為の底辺には、桐壺帝からの冷泉即位という要請が強く働いていたと思われる。紅葉賀巻で、光源氏と瓜二つの冷泉を目の前にした桐壺帝は、光源氏にかけていた更衣の夢を知っていながら叶えて上げられなかった無念さを噛みしめる。身分の低い桐壺更衣腹の光源氏とは異なる、高貴な藤壺を母親とする光源氏の子冷泉の立坊は、桐壺帝の絶対的支援により土台が築かれたのである。

をりふしに従ひては、御遊びなどを好ましう世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ、春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞つけたまふも、かたはらいたきものからうれしと思す。（葵・一一）

右は、退位した桐壺帝が、参議兼右大将である光源氏に新東宮（冷泉）の後見を頼む箇所である。実の我が子の後見役を任されて、光源氏は嬉しくもあり、また、後ろめたくもある。しかし、すでに「世の中変りて後、よろづものうく思され」（葵・一一）とあるように、光源氏は官位こそ重いものの、右大臣家が政権を握っている世の中において政治を執り行える立場ではなかった。「内裏などにもあまり久しう参りはべらねば、いぶせさに」（葵・三七）とあるように、光源氏は参

内することさえ避けていた。光源氏は、冷泉が東宮の時には、後見としての政治勢力と自覚をあまり持っていなかった。

中宮は涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思しめさる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いとものはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、かへすがへすのたまはす。

（賢木・八九）

右の引用文は、桐壺帝が光源氏に、藤壺と冷泉のことを頼む場面である。ここでも、桐壺帝は、光源氏が冷泉の後見として尽力することを切実に願う。しかし、父帝がこの世を去った後になっても、光源氏は依然として藤壺に執着し続け、

内裏に参りたまはんことは、うひうひしくところせく思しなりて、春宮を見たてまつりたまはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。また頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なほこのにくき御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、

（賢木・九九）

とあるように、継母に迫るばかりであった。藤壺は桐壺帝がこの世を去ると、ひたすら東宮の無事安泰を祈り、唯一の後見である実父の光源氏がその役を務めてくれるよう要請するが、当の光源氏にはその余裕がなかったのである。冷静に現実を見極める藤壺と愛に殉じる光源氏との現状には、大きな隔たりが置かれているのである。

藤壺の出家については、桐壺帝の崩御を悲しんだあまりの衝動的行為、あるいは、激しい光源氏の愛からの逃避の手段として捉らえられてきているが、夫亡き今、藤壺は、継子との再度の不義により、第二の冷泉を孕むという可能性を完全に排除するために出家しなければならなかった。さらに藤壺にとってより深刻な当面の課題は、自分と冷泉を見守ってくれる保護者がいないということであった。

光源氏は、藤壺の出家の原因を、「母宮をだに、おほやけ方ざまにと思しおきてしを、世のうさにたへず、かくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ。我さへ見たてまつり棄ててはー」（賢木・一二六）と、移り変わった世のためであるとしている。光源氏の東宮の後見という自覚は、藤壺の出家によりやっと芽生えはじめている。藤壺の出家は、彼女の意図していた結果をもたらしたのである。

＊　＊　＊

光源氏の藤裏葉巻における准太上天皇即位は、冷泉によるものである。冷泉とは、光源氏が父桐壺帝を裏切って継母を

孕ませた結果得た我が子である。冷泉の出産予定日が遅れても、桐壺帝は何の疑いも見せなかった。光源氏に酷似する皇子が生まれてきた時、桐壺帝はただ喜ぶばかりであった。桐壺帝は、単に我が皇子の出産を喜ぶのでなく、光源氏に酷似している高貴な皇子の誕生を喜んだのである。自身の退位を前提条件として冷泉を立坊させた桐壺帝の強い意志には、桐壺巻で一度は挫折した光源氏への皇位継承に対する強烈な執着さえ読みとることができるのではなかろうか。だからこそ桐壺帝の断固たる意志によって冷泉は立坊されたのである。また桐壺帝は退位していても、「世の政をしづめさせたまへることも、わが御世の同じことにておはしましつる」（賢木・九〇）のであったが、若い朱雀帝に東宮（冷泉）と光源氏を託してこの世を去った。冷泉の即位も、桐壺帝の意志によるものであった。そしてそれは、光源氏の子供を産んだ藤壺の賢明な生きざまにより守られるのである。

光源氏の誕生を語る『源氏物語』の冒頭は、実は両親の在りかたを問うものであった。摂関政治のもと、父桐壺帝は身分の低い桐壺更衣を溺愛し、朝廷という公的世界で政治的問題を起こしていた。母更衣は人々との葛藤の中で横死してしまうが、両親が抱えていた一連の問題は、生まれてきた光源氏に不利に作用し、主人公の前途に暗い影を落とす。両親の悲恋物語には、作者が物語の冒頭から掲げている身分意識と女の在りかたという作者の問いが執拗につきまとう。しかし、強力な後見のない母更衣には、それだけの力もなく物語の舞台から退場していく。そこで、残された幼い光君の将来を導いていくべき父桐壺帝存在が強く打ち出される。そうした視点で見ると、弘徽殿女御一派との尖鋭な政治的葛藤のなかで行われた袴着儀式からも、若君の将来がすべて父帝に任されていたことが改めて確認できる。

桐壺帝は桐壺更衣の死後、皇子を出産して実家を繁栄に導かねばならない女の現実を改めて認識する。そのような桐壺帝の面影には、光君の格付けの全てが父帝に任せられたという厳しい現実が浮き彫りにされる。高麗の相人は、若宮が生きる道を桐壺帝の判断に一任していた。父帝こそが若君の歩むべき道を決めなければならなかった。父帝の賜姓源氏という判断は、後見のない桐壺更衣の状況と身分の低さを前提にしていて、極めて現実的であった。

しかしながら、父帝は、愛する我が子の固有の相を忘れなかった。光源氏の相は帝王の相であって、臣下でも准太上天皇の相でもない。物語の第一部が、光源氏の准太上天皇即位をもってハッピーエンドで一応締めくくられるのは理に叶うものの、所詮太上天皇に準ずるものであり、帝王に即位したわけではなかった。光源氏の相そのものは、即位不可能な帝王の相であった。みやびな六条院に、高貴な女性を数多く集め、疑似王国を建設した光源氏ではあるが、父帝により固定された臣下という身分を超えることはできなかったのであ

る。

明石巻で、父帝の霊に遭遇した光源氏は、現状を認め、時世に逆らわないで生きようと覚悟を決めた。桐壺帝が拘っていた相を、光源氏自身が、逆らえない運命として強く意識しているのは澪標巻である。光源氏は、冷泉の即位にあたって、帝王の相を具備していながら、即位できないという相矛盾する我が宿命を反芻する。光源氏が帝王に即く機会は、物語の展開とともに遠ざかっていった。明石姫君が生まれる前までは、光源氏は自分の帝王の相を忘れてはいなかった。しかし、父帝の賜姓源氏という決断が正しかったと思いを馳せる光源氏は、自分が皇位とは縁が遠かったことを悟った。そして、帝王位を完全に諦め、娘明石姫君の誕生をきっかけに、源氏家の家長として生きようとする。そのかわりに光源氏の子供が皇位を継承していくのである。そしてそれは藤壺事件を出発点とする。

父帝の最愛の妻を犯し懐妊させ、生まれてきた冷泉の手で栄華を極めるという物語の構想のなか、冷泉の安泰をめぐる藤壺の行為の底辺には、光源氏の子冷泉を東宮に据えることで、光源氏に果たせなかった無念をはらした桐壺帝の意志が強く働いていた。藤壺の出家は、亡き夫桐壺帝への贖罪であり、冷泉の即位を要請してきた桐壺帝の意志を守り通すための賢明な選択であった。

おわりに

桐壺帝は、高麗の相人の予言で光源氏の皇位継承を諦める。桐壺巻で、光源氏の皇位継承は消えるのである。若紫巻で冷泉の皇位継承が語られ、光源氏で実現しえなかった皇位継承が光源氏の子供につながることになる。光源氏への皇位継承を諦めた桐壺帝の意志で、皇位は光源氏の子供に受け継がれていく。その子供は「瑕」の無い「玉光る」ものでなければならない。すなわち、「上の品」腹の子供の誕生が要求されるわけである。そこに光源氏と藤壺との密通事件の意義がある。『源氏物語』という長編作り物語の基盤がここで築かれたのである。

注

(1)『源氏物語』の本文の引用は、小学館日本古典文学全集による。例えば(薄雲・四四三)は、薄雲巻の四四三頁からの引用であることを示す。

(2)益田勝実「日知りの裔の物語」(『火山列島の思想』・筑摩書房・一九六九年・一八六頁)。

(3)高麗の相人の発言に関しては、字句的解釈も多く出されている。『花鳥余情』は、予言の前半を重く見て、「国の親」を天皇の位でなく、太上天皇の地位と解釈する。また、「乱れ憂ふること」を須磨流謫に結びつけ光源氏の個人的乱れとする。また、予言の後半の「おほやけのかため」を、天皇を補佐する摂関政治家とし、光

源氏は准太上天皇に即位したので摂関政治家の相ではないと解釈している（伊井春樹編『松永本花鳥余情』源氏物語古注集成第一巻・桜楓社・一九七八年・一六頁）。一方、本居宣長は、予言の前半と天皇の父准太上天皇を直結し、「国の親」を天皇の父に、「帝王の上なき位」を准太上天皇の位に、「乱れ憂ふる」を帝王になるには欠けるところ、「おほやけのかため」を摂政関白の位に、「またその相違ふべし」の「相」を帝王の相であるとし、決して摂政関白の相ではないとしている。すなわち、宣長は、光源氏にははじめから帝王の相があったがついに即位しなかったとし、帝王の相は確かであるが「乱れ憂ふる」ことがあるため、高麗の相人はそれが分らなくて怪しんだと説明する（『本居宣長全集』第四巻・筑摩書房・一九六九年・三二七頁）。また、『弄花抄』は、予言の後半に注目し、光源氏が臣下となると「乱れ憂ふる」ことは避けられたとして、あくまでも臣下の相を持っているとした（伊井春樹編『弄花抄』源氏物語古注集成第八巻・桜楓社・一九八三年・一五頁）。森一郎氏は、高麗の相人の言葉を帝王の相と臣下の相に分けて、内質として准太上天皇を言い当てている（「光源氏の宿世と予言」『源氏物語考論』笠間書院。一九八七年・三～二五頁）と指摘される。これもやはり藤裏葉巻における光源氏の准太上天皇即位に照しての解釈である。

（4）この予言に関して藤井貞和氏は、高麗の相人は藤壺事件を的確に言いあてている（「神話の論理と物語の論理」『源氏物語の始源と現在』・冬樹社・一九八〇年刊所収・一四三～一五五頁）とされる。土方洋一氏も、「相人の予言は光源氏の須磨退去や准太上皇の尊号を得ることよりも、実は藤壺宮との密通事件を目睫の標的として設定されている」（「高麗の相人の予言を読む」「むらさき」一七号・一九八〇年七月・一八頁）と指摘される。また、森一郎氏の説をうけた深沢三千男氏は、「高麗人予言（前半）の内に准上皇となる宿世は言い当てられている」（「光源氏の運命」『源氏物語の形成』・桜楓社・一九七二年・五七頁）とされ、玉上琢弥氏は、「帝王の位に昇るのである。ただし統治はしないのである。（中略）太上天皇に准する（譲位された天皇と同格）という待遇である」（「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御」『源氏物語研究』・角川書店・一九六六年・二〇八～二三三頁）と解された。日向一雅氏は、「非日常的な王権の実現が光源氏の所有した帝王相であった」とされ、さらに「准太上天皇位は光源氏の特異な王権を名実ともに完成するものであった」（『源氏物語の主題―家の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社・一九九一年・六九～七五頁）と論じられる。伊井春樹氏は、賜姓源氏と予言の前半を直結して、「相人は明確に即位へのコースを否定し、「おほやけのかため」に光源氏の進むべき道のあることを示唆したのであった」と述べて、後半を「柱石となって天下を補佐する相に立つと、光源氏の運命はまた異なってくるとの見解である」（「高麗の相人の予言」『源氏物語論考』・風間書房・一九八一年・三四～四五頁）と論じられる。

（5）北山谿太編『源氏物語辞典』・平凡社・一九五七年。

（6）日向一雅「予言の謎」注（4）前掲書、六四～六九頁に詳しい。

（7）塚原鉄雄「高麗相人と桐壺父帝―源氏生涯の路線定位―」（「中古文学」第二八号・一九八一年十一月・二八頁）。

（8）伊井春樹「六条院の形成」注（4）前掲書、四三頁。

（9）物語の中で「光る」という表現は、名前を含めて光源氏に十三例、夕霧に二例、冷泉に一例、明石姫君に二例が使われる。すで

に、目加田さくを氏の詳細な考察があるが、「光る」という表現は、光源氏とその子孫のみに用いられる美の様相として「光君」の名に由来し、光源氏の兄弟にはなく光源氏とその子に限る。「光る」という形容にこめられる美の内容は高貴にして完全な美を意味する（『源氏物語論』・笠間叢書・一九七五年・四〇〇頁）。光源氏の英姿の属性を代弁する卓絶した美質は、正編において澪標巻の予言で約束された三人の子供だけに引き継がれるのである。ただし明石姫君の場合、明石入道が見た夢によると、「君たちは世を照したまふべき光しるければ、」（松風・三九五）と、母明石君とともに世を照すべき光である。

(10) 関根慶子「藤壺物語はいかに扱はれてゐるか」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語Ⅲ』所収・有精堂・一九七一年・二〇六～二一七頁）。

(11) 高橋亨「源氏物語における出家と宿世―藤壺物語と王権の喪失―序説―」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語Ⅳ』所収・有精堂・一九八二年・一五五～一六四頁）。

(12) 清水好子『源氏の女君』・塙書房・一九八八年・一二一頁。

(13) 阿部秋生「藤壺の宮と光源氏（一）」（「文学」五七号・岩波書店・一九八九年八月・九～二九頁）。

(14) 後藤祥子「藤壺の宮の造型」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』所収・勉誠社・一九九三年・五〇～六八頁）。

（ばく・きせん　本学大学院博士後期課程）